

『学習言語指導法の効果に関する研究』

大阪芸術大学 初等芸術教育学科 教授 田中裕美子

はじめに

学童期の言語発達は思考や学習に必要な学習言語が中心であり、その習得に躓いている場合、知的には問題がなくても、学習が進まず、不登校につながる場合が少なくない。そこで、早期発見と適切な指導を行うために、新しい指導法を考案し、通級指導を受けている児童に新しい言語の指導法、ナラティブを用いた言語指導法と、従来からの一般的な言語指導法の両方を順次実施し、それぞれの効果の有無および効果の違いを比較し、より有効な指導法の開発および実用化を目指している。今回は、対象児童に指導を実践した教員や言語聴覚士に行ったアンケートの結果から主要な点について報告する。

研究方法

対象：東京、神奈川、栃木、新潟、大阪、徳島の1都5府県より小学1～6年までの40名が参加。1名は支援学級在籍、他は通常学級在籍で通級指導教室（＝言葉の教室）、もしくは医療機関にて言語聴覚士（ST）の指導を受けている。

指導方法：通級指導教室を通じて対象児と言語指導実施を担当する教員の協力を得て、ナラティブを用いた言語指導法（N法）と従来の言語指導法（L法）の2つの言語指導法を第一期、第二期と順次実施し、それぞれの効果の有無、効果の違いを比較した。

N法は、連続絵、ホワイトボードとマグネット（アイコン）を用いて話を聞かせる。その後、子どもに話を再生させるが、子どもの発話を目の前で付箋に記録し、自分の発話を意識させメタ認知スキルの向上も促す。発話再生後、ナラティブの構成要素（「誰の話？」「〇〇さんはどうしたの？」など）について発問し、あらためて話の構成要素の重要性を認識させた後、2回目、3回目の再生を続けるが、その合間に話に出てきた語彙の意味確認と短文作り、文法指導など含む。最後に、類似した自分の体験を語らせる。

L法は、言語の音韻、意味、文法、語用、読み書きの指導を、各指導者の裁量で従来通り行う。ただ、N,L法比較のため指導時間等は統制し、また各指導の内容がわかるよう、簡易な記録を求めた。

指導担当は東京2名、神奈川1名、栃木1名、新潟3名、大阪4名、徳島1名の計12名であった。

結果：

指導を担当した12名にナラティブを用いた指導に関するアンケートを行った結果から次の点について報告する。

1. 子どもの特性とナラティブ指導の効果との関係
①言語発達障害タイプ：社会性などに特に問題なく、課題にも取り組む姿勢・構えがついている子ども。日常的に表出はそれほど多くなく、「なんとなくその場にいることはできる」子どもには、かなり有効であった。特に、ナラティブを再生させて、子どもから表出を引き出すことで、子どもの考えや理解度が改めて明らかになった。

②ASD（自閉症スペクトラム障害）タイプ：このグル

ープの子どもたちに対する効果は個人差が大きいことが分かった。このタイプでナラティブ指導に向かないのは、「もう1回やった（からもうやらなくていい）」「自分は分かっているし、これ以上しゃべるのは無駄」と思ってしまう子どもであった。一方で、こうした感覚はそれほど強くなく、おしゃべりだけ相手に伝わらずいつもフラストレーションを感じているような子どもやアイコンに興味を示し、そこから「何を話せばいいかわかった！」と本人が納得できるタイプは指導に継続的に参加できており、指導に応え、効果も認められた。

2. 子どもの年齢と指導効果の関係

今回、比較的良い効果を出しているのは小3以上の学年の子どもであった。従って、メタ認識の伸びとかなり関係があると考えられる。また、低学年での指導効果があまり認められなかった理由には、指導内容が低学年には難しかったこともあり、検討が必要である。

3. 指導効果についての親からのフィードバック：おおむね良好であり、次のような報告があった。

- ・家で話す量が増えた
- ・今まで何を言っているのかよくわからなかったが、わかることが増えてきた
- ・作文で書く量が増えた

4. 指導者からのフィードバック：《実際に使用した上からの提言》

- ・子どもの話りのスピードに付箋筆記のスピードが追いつかず、その点が苦しかった。
- ・子どもから出た良い言葉を拾いきれず、後で録音を聞いて反省するなどのことがあった。
- ・話の中にあつた「自分ではうまくいかなかったけど、誰かに頼んだら…」という経験が子どもたちには身近でないようだった。
- ・マグネットアイコンをスピーチカードの代わりに使えそう、と感じた。
- ・書くことに抵抗感のある子どもは紙をみただけで怖気づくので、ホワイトボードとアイコンの組み合わせは良いアイデアと感じた。
- ・再生ナラティブは回を重ねるごとに上達していったが、自身の体験のナラティブはなかなか向上せず、アイコンを示した整理が必要だった。どうすれば自身のナラティブも上達するのか、考えていきたい。

考察：

学習言語の指導にナラティブを用いる効果について様々な点が明らかになった。中でも表出が少ない言語発達障害児、N指導法の特性が気になったASD児など、ナラティブ指導が適切な対象児のプロフィールが見えてきた。また、メタ言語が伸びてきている小3以上の子どもへの効果が高いことが分かった。その背景には、まず彼らの言語力がおそらく小3以下相当の段階にあって、今回の指導内容がその段階に合致していたことと、「何を練習しているか」の理解が可能な発達段階にあつたことが大きいのではないかと考えられた。